

証言による『南京戦史』(8)

46期 敵本 正己



五、中山門入城と城内掃蕩

1 作戰経過の概要

第十六師団の左翼隊(9i・20i)は12月12日、歩兵第九聯隊が中山陵を占領し、第二十聯隊は13日早朝、南京街道方面より中山門を占領した。そして中山門からは歩兵第二十聯隊の二ヶ大隊と第三十五聯隊(9D)が相線に進出し、歩哨を配置して入城第一夜を迎



昭和12年12月15日、宿舎、南京中央飯店に到着した第16師団司令部将兵  
◀16師団経理部・金九吉生氏撮影▶

えた。翌14日も引き続き掃蕩したが、住民は逃亡してその姿を見ず、ほとんど銃火を交えることなく平穩裡に終了した。

歩兵第九聯隊は、師団命令により城内には進入せず、紫金山一帯の散兵隊の掃蕩に任じた。15日に入城して国民政府附近に宿営した。また、師団司令部も15日入城して南京飯店、国民政府、総理府跡に司令部を置いて城内外の警備を指揮した(写真)。

その後、12月23日まで城内に駐留したが、12月23日の方面軍命令による配置替えにより、第十六師団は城内進入部隊(9D)その他)と交替して、翌年1月20日頃まで城内外の警備を全面的に担任した。

▼師団參謀長中沢三夫氏は、入城後の状況について、次のように述べている。

【東京裁判における重寶供述書】  
「第十六師団は12月13日未明、中山門の城壁を占領し、後方の約二ヶ大隊を城内に入

れ、あらかじめ指示してあった地域―大平山上元門、下関及び中山路を以て画する地域を掃蕩させた。翌14日も引き続き掃蕩した。

12月15日、第十六師団は司令部及び小部隊を以て城内に入ったが、師団の担当区域には住民は逃亡していなかった。

12月23日、軍の配置替えあり。師団の一部は、さきに入城した部隊と交替して新配置につき、城内外の警備に任じて翌年1月20日目前まで南京に駐留した。この新配置後に、離

民区は第十六師団の警備区域内に入った、離民区は入城当時から厳重に区別して警戒され、これが出入は特に許可されたものでない限り、将校といえども許されなかった。

入城後、下関に通ずる公路上に夥しい軍服、剣、弾入れ、軍帽などが捨てられていた。これらの軍装を捨てた兵は便衣となつて潜伏していることは、当時の状態からみて明らかであった。城内掃蕩の際、城内に中国人が居なかつたので、この便衣となつた中国兵が離民区に潜入していると判断し、12月25日、日中両国人による委員会を編成し、住民を調査することになった。(ゴジック筆者)

2 歩兵第二十聯隊將兵の証言  
▼森 英生氏の証言 (歩兵第二十聯隊第三中隊長、47期、明星大学勤務)  
「13日朝、中山門の城壁上で遙拜式を終えた中隊は、その場で城内の掃蕩を命じられ

た。私は中隊を率いて城内に降りましたが、降りたところは中山門から北寄り、城壁を利用した弾藥庫がある所でした。城内には敵兵はもろろん住民一人居らず、中隊は市中を下関に通ずる道路に出ました(注・中山北路。その道路を一步越えれば離民区です。見ると、離民区に接する道路脇には、敵の軍服がとろとろ山と積まれている。明らかに敵

が離民区に逃げこんだ証拠です。けれども、離民区には一指も触れることができませんので、やむを得ず輕微な道路上、下関方向に向けて据えて、散兵隊が離民区に進入するのを阻絶しましたが、もう時機おくれでした。

この時、下関方向から一台のトラックが走ってきました。見れば紅卍字の旗を掲げ、軍服の敵兵を満載し、アツと驚く間に、人もなげに我々の戦線を突っ切り、通り抜けて行き

ました。このトラックの行動は、まことに目に余るものがありました。

このようなおこしはありましたが、弾丸一発も使わずに城内の掃蕩を終わったのであります。他地区でも同様であったと思いますが、城内は静穩そのもので、掃蕩の第一夜など殆ど無警戒でおりました。その夜、私は炭火の酸化炭素中毒で危うく命を失うところを、衛生兵に助けられましたので、よく覚えております。

私たちは、南京占領から翌年1月末北支に転進するまで四十数日間、城内の北西半部に駐留し、朝香宮軍司令官邸(長江飯店といつた)と思ひます。軍司令部は首都飯店でした。

周辺を警備しました。私たちの宿舎は、中央ロータリーから下関に進んだ道路の右手にあり、さらに進むと右手に松井軍司令官邸がありました。

住民は一人も帰ってこず、難民区は立入禁止で接触がなく、便衣隊狩りなど、任務外のことと関知せず、追送糧秣で正月用品が届きましたので、至極のんびりした年末年始を過ごしました。

第一線歩兵中隊長としての戦闘体験をもとにして、南京事件は虚構であるという私の考えを述べます。

(1) 目撃者がいない。

私は戦後、戦犯容疑で米軍の取り調べを受けましたが、これは日本人同士の密告によるものであり、この自分の体験からしても、東京裁判以来、いろいろ議論はあつても、多数従軍した日本人記者その他の中から目撃者や密告者が現われ、かの犠牲者40万人に及ぶという虚説の、しかとした証言がなされたというのを聞かない。

(2) 当時、南京でそのような噂を全然聞かなかった。

大虚説といえ、一中隊長や大隊長などが、恣意で実行できるものではない。必ず計画者、発令者、命令の伝達者、実行者があるはず。たとえ、極秘裡にやつたとしても、必ず洩れて噂となつたはずですが、そのような組織的、計画的な残虐行為が行われたという噂は、四十余日にわたる南京駐留間、その後一年間の中隊長在任中も、一度も聞いておりません。

(3) 敵側の巧妙な虚構の宣伝。

狭い城内の四分の一を区切つた難民区に充満する住民を抱え、降伏勧告を無視し、首都防衛を宣言すること自体、非常識です。それによつて生ずる不測の事態は、すべて中国側の責任であつたにもかかわらず、これを逆用して虚説という宣伝を展開したと考えます。

城外の激戦、城内の市民や第三国人に与へた恐怖は、測り知れないものがあつたでしょう。凄惨な戦場の光景を眺めた第三国人は、敗者に同情し勝者を憎んだかとも思いますが、このような感情に訴へた中国側の宣伝

が、いかに効果があつたかは想像に難くありません。戦場で当然発生した戦死者までも、日本軍による残虐行為として、世界に訴へたのでしよう。

(4) 第三国の対日悪感情

敢正中立であるべき第三国も、われわれの軍事行動を極力妨害し、援護行動をつげけました。私が体験した紅卍字のトラックの暴走も然りです。私は今なお、吊革に立つ満員の敵兵の顔が忘れられません。

このような先入感を持つ第三国人がさきほども申しましたように凄惨な新戦場を眺めたとき、「諸悪ごとく日本軍にあり」としたことは、必然の成行きでしょう。

(5) 逃亡または釈放俘虜の虚構の証言

残念なことは釈放俘虜の虚構の証言がなかつたが、私は日本軍の一部に不法行為の大部分は釈放されたという噂を聞きませんでした。その多くは、逃亡ではなかつたと思ひます。私が俘虜護送のとき垣間見た収容施設の不備、多数の俘虜に対する管理の不馴れなどから、逃亡が多発し、日本軍による懲罰的行為が加えられたことも大いに考えられます。

これらの俘虜が敵側に無事帰つた場合、自己の行為を正当化し、すべてを残虐的行為として針小棒大に報告したものと推察されます。これらが「南京大虚説」という虚像に拡張したのではないでしようか。

南京攻防戦においては、戦闘の特質上多数の投降者を得ましたが、たしかにわれわれの倫理観から、俘虜を蔑視した傾向がありました。我が軍一部の分子の不法行為によつて、禍害を蒙つた中国人民に対しては、深く陳謝しなければなりません。しかしながら、一方的な資料のみによつて「大虚説」と断定され、われらが子孫に歴史として伝えられることは、なんとしても忍び得ないところであります。

▼栗原直行氏の証言

砲中隊長代理、49期、浜松市幸三十二二置しているとの噂が流れていましたが、私が行つた時は、戦場掃除後であつたのか、屍体は見かけませんでした。

「私は連射砲中隊の小隊長として従軍しましたが、南京戦前に中隊長が負傷入院したため、中隊長代理として参戦しました。南京城内には12月13日より12月23日まで滞在し、23日、城外の湯水鎮に移動して警備に任じましたが、記憶をたどつて入城前後の状況を述べます。

12月13日未明、聯隊の第一線が中山門を占領しましたので、私の中隊は天明頃、中山門東側地区に進出し、本道両側地区に陣地を占領し、敵の逆襲に備えましたが、反撃はありませんでした。

孝陵衛付近では激戦が展開されたので、中山門に通ずる本道側には、若干の遺棄死体をみましたが、多数であつたような記憶はありません。13日天明頃、中山門東側に集結した際、聯隊本部が若干の捕虜を捕えましたが、上級司令部に送つたと思ひます。

聯隊は中山門東側に集結した後、14時頃より城内に進入を開始し、私の中隊は第二大隊に協力を命じられました。所命の掃蕩区域には、住民の人影も遺棄死体もなく、まして交戦することもなく、平穩裡に掃蕩行動が終了しました。

割り当てられた中隊の宿营地には、多方のまだ明るいうちに入つたのですが、国民政府の要人、林森の邸宅付近で、屋内はかなり荒らされていましたが、住民は居りませんでした。

入城後、日には、はつきりしませんが、大隊に配属されて玄武湖付近の掃蕩に参加しました。太平門を出て城壁の外側に沿つて前進し、玄武湖周辺を行動したのですが、交戦することなく、示威行動に終わったことを記憶しております。この付近では死体を見ませんでした。

入城後何日経過していたか、聯隊が城外に移動する数日前ではなかつたかと思ひます。見学のため挾江門を出て下関付近に行きました。当時、下関には多量の遺棄死体を残

置してゐるとの噂が流れていましたが、私が行つた時は、戦場掃除後であつたのか、屍体は見かけませんでした。

▼伊庭益夫氏の証言

(歩兵第二十聯隊第十中隊小隊長、現住所、京都府舞鶴市宇本四五)

中山門は12月13日朝、他中隊が占領し、わが中隊は軍旗護衛中隊として中山門から入城した。中山門は三つあり、北側の崩れた門をよじのぼり、中山門上で軍旗を捧じて「世紀の万歳」を行った。

中隊は入城後、直ちに市内掃蕩に移つて国民政府跡に突入したが、敵兵を見ず、中山北路の線に警戒網を張り、陣中勤務の態勢をとつて約十日間の警備を終わり、他部隊と交替して湯水鎮に後退した。

なお、伊庭氏は筆者の質問に対して、次のように答へた。

○ 入城当初より、外国租界や難民区への立入禁止の命令は、敵重にこれを履行しました。

○ 城内では火戦を交えず、婦女子、市民および便衣の散残兵の殺害など、認めておきません。

○ 戦車による血の海とか、キヤタピラで踏みつぶす、死体累々の惨状など全くありませんでした。

○ 中山門の城壁上で捕虜を一行にならべて殺害して落としたというような光景については見聞しておりません。

▼森王 孫氏の証言 (歩兵第二十聯隊第三大隊長代理、49期、山口県下関市貴船町四一〇一五三)

「私は12月15日まで中山門城外に在つて、16日第十六師団長、中島中将が中山門より入城される時、城門内で第二大隊が軍旗を捧じて整列して迎え、私の第三大隊は師団長に従つて入城した。

そして、翌年1月23日(あるいは24日)か正

確でない)まで、城内に駐留して警備に任  
じ、一度ぐらゐ城外の掃蕩に出た記憶がある  
が、戦闘はなかった。

約一ヶ月余りの警備間、街に死体が散乱し  
ている様子など見たことがない。もちろん、  
機関銃で集団射殺したという、そんな銃声も  
聞かず、うわさも聞いたことがない。

ただ、下関に行ったとき、揚子江岸に多数  
の溺死体が漂着しているのを見た。これは、  
最後まで残された中国兵が、南京陥落前に挾  
江門からなだれを打って逃れ、江上で舟が撃  
沈されたものである。」

▼池田早苗氏の述懐 (歩兵第二十聯隊中隊  
長、4期、大阪市大正区三軒家東六一一四  
一〇)

「中国軍は退却にあたり一般住民と混交  
し、しかも便衣に変装しているので識別が困  
難でした。南京陥落後、何日後か覚えていま  
せんが、揚子江岸の下関に行ったことがあり  
ます。死屍累々で、実数は五、六千ぐらいで  
はなかったでしょうか。地上に伏した死体  
は、多数に見えるのですが。」

3 歩兵第九聯隊將兵の証言

▼六軍政次郎氏の証言 (歩兵第九聯隊第一  
大隊副官、4期、大阪府堺市新金剛町四丁  
目三一九一三〇六)

【筆者注】 歩兵第九聯隊の入城前後の行動  
については、当時の第三中隊長赤尾純蔵氏  
42期(京都市東山区山科日ノ岡石塚町二五  
一四)、聯隊旗手、中村竜平氏49期(東京  
都田無市南町四一〇一〇)、大隊本部  
書記、佐藤増次氏(滋賀県長浜市神前町八  
一八)、第三中隊長(のち少尉)増田  
寅一氏(京都市伏見区深草本町六七二)、  
第二中隊長小隊長、野村美代太郎氏、第三中  
隊長指揮官曹、長谷川茂雄氏などからも貴  
重な資料をいただいた。

六軍氏の証言を中心に、聯隊の行動をう  
かがうこととする。

「13日早朝、歩兵第二十聯隊が中山門を占  
領して入城したが、わが聯隊は師団命令によ  
り城内に進入せず、掃蕩隊となって紫金山一  
帯を掃蕩することとなった。

南京一番乗りをめざし、南京入城を夢にま  
でみて戦った私たち將兵は、南京城壁占領の  
瞬間、城内進入を禁止されたのである。この  
軍の統制は、まことに厳しく、見事なもので  
あった。

内地では「南京占領を祝う提灯行列」で國  
民が浮かれ気分が昂り、紫金山の激戦で多数の  
戦友を失ったわれわれは、12月の寒空のもと  
寝るに家なく、枯れ木をひろって焚火をし、  
乾パンをポツポツとかじりながら、今は亡き  
戦友を偲びつつ、わびしい戦勝気分を味わ  
ていた。左腕を吊るしたままの姿で病院を飛  
び出した私は、傷の手当てもできず、寒くて夜  
もほとんど眠れず、二晩をすごした。

12月14日、大隊は城外に居たが、中山門  
から城内数百メートルのところ、師団の第  
二野戦病院が開設されたので、大隊附軍医の  
指示により入院した。大通りの北側の四階建  
てぐらゐの建物で、中国の病院の跡とかい  
い、ガランとしていた。衛生兵が中国人の雜  
役夫を使って、部屋の跡片づけ、掃除、寝台  
の配置などまでゴッソり返していった。

付近の市街は、ひっそりとして銃声や騒音  
を聞かず、火災もなかった。病院では人手が  
足らず、多数の中国人が雜役として働いてい  
た記憶がある。

入院後二、三日間は、食事は一椀の飯と、  
粉末味噌をとかした味噌汁一杯、汁の中には乾  
燥野菜が少々浮かんでいる程度であった。数  
日たつて、味噌汁に「水牛の肉」とかいうの  
が一切れ入っていたが、半張革をシャブッテ  
いるようであった。

私は14日より十日間入院治療をうけて、24  
日に退院して原隊に帰ったが、城内は極めて  
平穏で、特に変わったことは見聞しなかった。

大隊は15日頃、城内の宿舎を割り当てら  
れ、17日頃城内に移駐したよしであるが、私  
が原隊復帰後に、城外掃蕩に任じていた小隊  
間戦闘で、

長から、次のような話を聞いた。  
「一ヶ小隊で中山門東方紫金山中の警備を  
担当したが、激戦により小隊は約三十名に減  
少していた。夜半、東方の山中から敗残兵數  
百名が、日本軍が居るのに気付かず、南京に  
向かって来たのを捕えた。

しかし、我々の人数が少なく、もし小人数  
と判れば危ないので、銃を取りあげ凹地に集  
結させ、外側の兵のみを電線で縛って逃げな  
いようにした。

ところが、日本軍が小人数とあなどったの  
か、手榴弾を投げつけてきて暴れだし、取捨  
がつかなくなったので、軽機・小銃で弾丸の  
ある限り射った。小隊長も、手向かってくる  
敵を斬りまくり刀が折れた」

▼佐藤増次氏の述懐 (第一大隊本部先任曹  
記)

私は入城後の19日頃、戦闘詳報作成の資料  
を得るため、一ヶ分隊の護衛を連れて城外の  
戦跡を見て廻った。

中山陵、紫金山中腹、玄武湖南側を至って  
城内に帰ったが、私の踏査経路では虐殺の跡  
らしいものなど見受けなかった。ただ城内に  
通ずる道路付近に(太平門か玄武門である  
う)地雷の爆発により、人馬の死体が散ら  
して見えた。

市街では住民を見なかったが、大隊本部の  
宿舎付近の民家の奥には、各家に一、二名の  
住民が残っており、残した家財を見張ってい  
たようである。本部の兵が食糧徵発に行つて  
「奥の方に人が居た」と言っていた。

二、三日後、聯隊本部の会報に出席した  
が、本部内では住民も、ポツポツと家に帰  
り、卵を部隊に売りにきた者もあった。  
家具や寝具などを徵発したことはあるが、  
住民に危害を加えたりしたことはない。」

▼長谷川茂雄氏の証言 (第三中隊長指揮班、  
軍曹)

【筆者注】 長谷川氏は、現在老衰甚だし  
く記憶は正確ではないがと前置きして、第  
三中隊の行動を詳しく述べた。これを  
読むと、現役軍曹時代「身命を賭けた行  
動」というものは、実によく覚えてい  
るのだと感心した。入城前後の部分のみを摘  
記する。

「私たちは紫金山山麓の戦闘が終わって、  
12月15日頃、市内が平穏になった頃に入城し  
ました。市内は平穏で、馬車が走り、住民も  
歩いていのように記憶しております。聯隊は  
約一週間城内に駐留したのみで、南京東方の  
温泉地に約一カ月駐留しました。

ただ南京郊外で大きな穴を掘り、傍らにか  
なり多数の死体があったのを見た記憶があり  
ます。戦場掃蕩であったと思えます。」

▼竹内五郎氏の証言 (歩兵第九聯隊歩兵砲  
隊衛生兵、藤沢市羽鳥三一一七)

私は歩兵砲隊(隊長、服部大尉)に昭和12  
年1月入營し、衛生兵として中国戦線に参加  
しました。

南京戦では中山門から入城し、軍官学校に  
宿営して、12月の暮れ近くに湯水鎮の兵舎で  
正月を迎えました。  
南京城内は外出禁止でしたが、私は衛生兵  
でしたので、患者をつれて大隊隊務室や野戦  
病院に行きました。

戦死者の死体がゴロゴロという光景は目撃  
しておりませんし、火災もなかったと思いま  
すが、国民政府の建物の左側に中国の消防署

隊綱帯所で治療をうけ、南京城内の原隊に追  
及しました。したがって、入城直後の状況に  
ついては、知りません。ただし、原隊に追及  
中、南京城内の基礎工事途中の建築現場で、  
五、六名の中国兵の死体を見たのみです。  
その後、新都市の兵營に移動するまで、數  
万に及ぶ屠殺など、その痕跡等も見たことは  
ありません。」

があり、消防車もあって一度バヤで出動して行くのを見たことがあります。不思議なことに、街頭には警察官が立っていないかったことです。

その後、大別山で負傷し南京車站病院で全快して原隊復帰の時、南京車站に泊まって外出したら、そのときには十字路に警察官が立っていました。

▼六軍政次郎氏は、いわゆる「虐殺」問題については、次のように述べている。  
(1) 城外の戦闘は、追撃態勢から外郭陣地の攻撃に転移し、整齊たる陣地攻撃ではなかった。わが軍は各所で楔状に深く突入して、中国軍の陣地が崩れたのである。したがって、陣地に配備されていた中国軍の大部は、日本軍が深く後方に進出したことに気付いて、12月10日頃以降、下関の渡船場めざして敗退した。

この間、紫金山の山中、あるいは南京城東北方地区で、日本軍と衝突して各所で撃破されたが、これは首都の攻防という正規の戦闘行為である。

城門占領後は、戦闘区域、進入部隊を統制して、不應の事故防止に努力が払われた。  
(2) 入城後は早々と住民が復帰し、日本軍は彼等の一部を雇傭した。

(3) 南京占領後、12月24日頃までは、攻略部隊をもって城内警備にあてられたが、治安が回復次第、速やかに郊外の兵営に移した。

この間、上司より厳しい示達があり、文化財の保護にまで細心の注意を払った。

(4) 上海から南京に向かう追撃戦では、北支では見られなかった地域住民ぐるみのゲリラ的抵抗にあり、いくたびか、危地におちいた事例があった。

したがって、個々の反撃行為はあったと思ふが、南京のような大都市で、無抵抗の市民を殺すなど、そのような話は当時、聞いたことがない。(ゴソック筆著)

#### 4 師団副官、参謀の証言

▼師団副官、宮本四郎氏34歳の遺稿  
第十六師団司令部の入城  
13日早朝から各部隊に警備地区を区分して入城し、師団長は蔣介石の邸宅に入り、司令

部は、南京市街東寄りの「南京飯店」に入った。ところが、電気がつかず水道も出ない。蠟燭の光の下で薪を焚いて暖をとる。煙が漆々と廊下に満ち、食事はバラ米の飯と水牛のビフテキ。ビフテキという美味そうだが、水牛は変な臭いがあるし、硬くて歯が立たない。この水牛は、追撃荷物に乗せたり、歩兵砲を挽かせてきたのが、食卓にのぼってきたのである。

師団長宿舎には、手押しポンプの井戸が一つだけあった。四、五日した頃、兵が臭い臭いという。仕方がないので遠くから水を運ぶことにした。

師団長宿舎には、師団長と私と衛兵一ヶ分隊が居住したが、一国の宰相の公邸としては、まことに質素なものであった。

ホテルと師団長宿舎とは一キロ以上離れていて、炊事ができないのでホテルに食事に通っていた。

その後、司令部は中華民国政府の総理府の建物に移った。これは洋館と中国風建物とを継ぎ合わせたような建物で、廊下や庭でつないでいた。参謀部、各部とも戦後処理で多忙をきわめた。

南京城内にはわが師団が警備することになり、南京陥落後は内地からいろいろの人がやってきた。

なかには、海軍関係の剣道の教士が、陸軍将官の紹介状を持ってきて、非常識にも捕虜を斬らしたけれど、師団長に直接申し込んで来たらしい。もちろん、こんな輩は門前払いをくらわした。

城内に入ったとき、下関に向かうメインストリートで、紺に緑がかかったズボンが、舗道のコンクリートが見えないほど敷らばって、それが延々一キロ以上に及んでいた。変なところだと思つたが、これはまさしく中国兵のものであった。軍服を脱ぎ捨てて民間人に化けて逃げたのである。これこそ、歩兵第三十八聯隊の下関進出で、退路を断られた中国兵の残したものである。

#### 中略

城内には婦女は一人も居なかった。これはカトリック神父が、立派な煉瓦壁のある区域に收容して守っていた。これに依つて「難民区」というのがあり、ここには男ばかりが集まっていた。どうして食っているかと思ふほど多勢いたが、間もなく、その中に中国兵が逃げ込んでくるのが明らかになった。

(入城式及び式後の祝宴の状が記録されているが省略する)(ゴソック筆著)

▼大西一氏の証言 (上海派遣軍参謀、36期)  
「終戦後、日本軍南京占領時、残虐行為が

あつたと盛んに宣伝されましたが、日本はこれに対抗する何らの手段を持たなかつたため、それが真実のように誤解されました。それが、松井石根大將は東京裁判において、第六師団長谷中中将は南京軍法廷において、それぞれ死刑の判決をうけて処刑されました。

私はその時、別の事件で果嶋に入つており、証人として出廷すると言いましたが、私は果嶋に入所している身分であり、軍司令官の弁護をその参謀がするのでは、余りにも近すぎるとして出廷できませんでした。兩將軍が南京事件の責任を負わされ、処刑されたことは、誠に残念でなりません。

さて、南京で残虐行為があつたか否かの問題であります。非戦闘員が混在した戦場です。絶対にはなかつたとは言えませんが、絶対にはなかつたとは言えませんが、絶対にはなかつたと言言しま

な残虐行為は、絶対になかつたと言言しま

な残虐行為は、絶対になかつたと言言しま

な残虐行為は、絶対になかつたと言言しま

#### 入城直後の状況

置いた建物)がありますが、中国軍がこの建物に拠つて頑張っているの、第十六師団の一部がこれを攻撃していた。私は大隊長のところに行つて状況を聞き、健闘を祈つた後、街のあちらこちらを見廻つたが、住民は殆ど居らず、また何らの異状を認めず司令部に帰りました。

南京の守備兵は、11日夕から挾江門を経て揚子江岸に向かい続々退却を開始しようだが、13日午後になると、下流方面より山田支隊、上流より第六師団の一部が進出してきて、退却する敵を挟撃した。

私は当時、前述のとおり第十六師団の一部と会つた後、司令部に帰つたので、挾江門内外の状況は知らなかつた。18、19日頃(?)所用のため挾江門を通り下関に行つたとき、戦場掃除が行われていなかったため、挾江門下関道とその両側および揚子江岸には、多くの死体がそのまま残つていた。

最近多くの人から何人くらいかと聞かれるが、これは見た人の主観で大いに違ふので何人と言うことは難しい。強いて言うならば、三千人〜五千くらいというところだろう。

この死体は、直ちに兵站部隊に指示して処理したが、城内に残留していた英米人が、この死体を見て「虐殺」と宣伝したらしい。

この中には、非戦闘員も含まれていたことと思うが、武器を持って退却する敵を攻撃することは、当然の軍事行動である。住民が混在しておれば被害は免れ得ない。なぜ中国軍は、整齊と組織を保ち、白旗を掲げて降伏しなかつたのか。市内の住民は、適当なところに集まつて、市役人の統制のもとに、非戦闘員たることを表示しておれば、被害を最小限に食い止められたらだらう。事矣、金蔵大学を中心とする難民区は、英米人の手により管理され、日本軍もこれを認めて無事だったのである。

当時の南京は、中国軍の指揮官、中国政府の役人は部下住民を見捨てていち早く逃げていた。何故、市の役人・軍の指揮官らが、民衆を整理しておかなかつたか、残念でなら

民衆を整理しておかなかつたか、残念でなら

民衆を整理しておかなかつたか、残念でなら

民衆を整理しておかなかつたか、残念でなら

ない。――

占領後の警備その他  
「占領直後の警備担任は、最初第九師団であつたが、第九師団はなるべく早く上海附近に帰って戦場掃除がしたいと言ひ、第十六師団に替わつたのである。  
師団長は中島中将、中沢参謀長は温厚な人格者であつたが、師団の細部の状況は情報主任の専田盛寿参謀30期、後方主任の木佐木久少佐33期両氏に聞いて欲しい。

▼筆者は、専田参謀の消息を尋ねたが不明であつた。木佐木参謀は現在八十歳の高齢であるが、鹿児島市に住んでおられることが判つた。早速連絡したところ、次のようなお便りをいただいた。  
「占領後二三日間に非戦闘員一万二千人を殺害? そんな事実は全くありません。松井大將、朝香宮軍司令官の敵命により、軍紀・風紀を厳しく取締まり、参謀連中まで市内を巡回して非進を戒めました。実は私も巡回中に中国人からの知らせにより、残念ながら強姦の現場を取り押え、原隊(野砲兵第二十二聯隊)に進行して聯隊副官に敵罰を要求したことがあります。  
このような不法行為が若干あつたことは否めませんが、一万二千人殺害など噂に聞いたこともありません。」

5. 「中山門内惨劇説の考察」  
大虐殺説によると、「13日か14日日に中山門城壁上で捕虜(紅槍会匪)を惨殺した」(東京日日新聞特派員の鈴木二郎記者の目撃記)。汪良氏が中国掃蕩者連絡会の訪中団に頼つた話「13日、城内の進入の日本軍によつて中山路、中央路は、血の海、戦車で蹂躪した」などがあるが、若干触れることとする。  
城壁上の捕虜惨殺説について――  
この問題は、洞富雄氏と山本七平氏が、目撃した日時・果たして紅槍会匪であつたかどうか・殺される捕虜の表情・声までどうやうか・確認したか・中山門一番乗り部隊判定などについて、N軍曹の証言(歩兵第三十五聯隊第二大隊本部附軍曹の中尉、野村敏明氏)の信憑性にまで触れて論争している。その細部に立ち入ることは避けるが、「中山門一番乗り」部隊の判定の困難性については、森英生氏の証言(前出)で述べたとおりであり、論争の本筋からは外れて問題である。  
洞氏は中国の農民解放闘争における紅槍会匪の歴史まで述べ、「南京攻防戦当時、南京防衛軍に編入されていたとしても、すこしも不思議ではない」という仮説を展開しているが、中国側の『抗日戦史』によると、南京防衛軍の編成には紅槍会匪は記録されていないようである。  
また、城壁上の捕虜の表情、声の確認について「鈴木二郎記者が望遠鏡をもつて見たとしても……」等々と述べているが、中山門から入城した参戦者の証言によると、このような事実は認められない。鈴木二郎記者ただ一人が目撃したのであろうか。  
――血の道路、戦車蹂躪説について――  
汪良氏、許伝音氏(紅卍字会副会長)、ペーソ博士(金陵大学教授)らの証言を綜合すると、  
「13日、15日の間、城内の道路に満ちあふれた避難民、退却兵、負傷兵の群れを見、見さかいてもなく銃殺し、戦車がキャタピラで死体の上を踏みつぶしながら進み、中山路・中央路は血の道路となつた。南・北・東・西各方面の大通りでは約五百の屍体を見、入城後数日間に男女、子供を含む非戦闘員約一万二千人が殺された」と結論できる」と述べている。ところが、参戦者たちの証言によると、「城内の道路周辺ではほとんど住民の姿を見なかつた、脱ぎ捨てられた軍服の山はあつたが……」という。比較的平穩裡に掃蕩を終つているのである。  
また、戦車中隊長城島越夫氏40期は、前述のとおり戦車による蹂躪説を首下に否定して、このように城内掃蕩について、両者の証言は大きく喰ひ違ふのである。

### 会員の声

▼萩原誠氏の述懐 (元第百十四師団兵器部勤務、横浜市住住)  
いわゆる「雨花台の虐殺」について私は南京攻略戦に参加した一人である。抗州湾上陸から一ヶ月余り、ひたすら南京を目指して戦い進んだ。当時私たちは、柳川兵団の作戦命令に基づき、昭和12年12月12日には首都南京に突入するという意味から、一、二

12月10日秣陵関の堅陣を抜いた聯隊(千葉小太郎大佐指揮の歩兵第百二聯隊)は、南京城外最強の堡壘「雨花台」へ殺到したが、堡壘上から射ちおろされる砲撃によって、私たちは一歩も動くことができなかった。聯隊長は虎の子の軍旗護衛小隊の中から、小玉伍長以下8名の分隊を抽出し、雨花台上の堡壘に突撃を命じた。  
標高四〇〇米の頂上を目指して、小玉分隊は日章旗をかざしながら一歩一歩肉迫して行った。(筆者注・雨花台は標高約五十米、誤認と思う)  
野砲、歩兵砲の一斉掩護射撃は山肌を一変させてしまった。三十分後、頂上には日の丸があつた。聯隊長は副官に命じて上級司令部へ報告させる。  
「12月12日12時20分、歩兵第百二聯隊は雨花台を占領せり」と。  
それから私達は、軍旗を先頭に雨花台を降り、一挙に中華門へ突進した。雨花台の堡壘を失つた中国兵の大多数は城内へ退却したが、既に城門は閉ざされ、城壁下を右往左往し、窮鼠となつて我軍に反撃してきた。至近距離からの射撃で城壁下や手前のクリークの中には、忽ち死体が果々と横たわり、辛じて岸に泳ぎついた者も全滅した。  
こうした光景は戦場にあつては当然のことであつて、喰ひか喰われるかの戦いである。

### 会員の声

▼仙鶴門鎮における集成騎兵隊の戦闘  
(騎兵第三聯隊本部書記、少佐22期、加藤正吉氏、名古屋市千種区鹿子町四一―二)  
【筆者注】『偕行』59年8月号に「仙鶴門鎮の戦闘と投降捕虜」(48期、沢田正久氏の証言)を掲載したところ、松野治郎氏(騎兵第三聯隊聯隊旗手、当時は負傷した後送される48期)の尽力により、騎兵第三聯隊から「集成騎兵隊の戦闘」に関する記事をいただいた。この戦闘は、3Kが主役を演じているので、その梗概を摘記する。沢田氏の証言と併読されれば、戦闘状況を知ることが出来る。

――戦闘前の状況――  
集成騎兵隊(3k、9k、17k、101k、軍直轄部隊として、9k長、森吾六夫佐23期指揮)は、12月11日、9Dと10Dの間隙閉鎖のため、徒歩部隊となり、進出を企図したが、同日夕刻、軍部命令により、紫金山北方地区を迂回して下関付近に進出し、敵の退路を遮断するに決した。同日二四〇頃16Dの右翼強化門付近に進出したが、敵陣地に阻まれ、反転して仙鶴門鎮付近に兵力を集結し、爾後の戦闘を準備した。  
師走の冷気は戎衣を通して露骨の寒結びがたく、南京攻撃の砲声は終夜にわたる夜夜を揺るがした。明くれば12日、天候快晴、各部

〔未完〕

数日後、聯隊は城内警備の任を解かれて反転、再び同じ道を通つた。激戦のあつた雨花台下では、数多の戦友の冥福を祈りながら湖州へと向かつた。  
悲問伝えられる「雨花台付近大虐殺」の現場など、どこにも見聞することはなかつた。枯れた芝生には、倭友たちの尊い血潮が黒く色が変わつて残っているのを見つ、胸のうずきか夏わがした。流布されてゐる雨花台の集団虐殺二万人というが如きは、全くの虚構である。

隊は南京攻撃を前にして、人馬の補給を完備し、同夜は集成騎兵隊の前哨部隊として警戒配備についた。

3 K 戦闘の概要

12日04時頃、前哨中隊たる第二中隊(中隊長43期木村正世大尉)正面に、銃声とともに爆発音が燃えとなり、伝令は「第二中隊正面に兵力不明の敵大部隊が本道上を急襲の如く東進中、第二中隊は目下この敵と交戦中」と報じた。ここにおいて、星聯隊長(21期、星替太郎中佐)は直ちに非常呼集を命じ、各隊に次の命令を下達した。

- (1) 兵力不明の敵大部隊は、第二中隊正面本道上を東進しつつあり、第二中隊は目下この敵と交戦中。
- (2) 第一中隊は速やかに本道上、第二中隊と聯隊本部の中間地区に進出し、この敵を攻撃すべし。
- (3) MG小隊は予の直轄となり本部北側に進出、第二中隊は現在地を確保すべし。
- (4) 予は現在地にあり。

聯隊長は第一中隊、MG小隊の進出を確認した後、副官川島大尉以下五名を前線に派遣した。戦場は一時小混乱状態になったが、再び激しい銃声がおこり、本部付近に負傷者が次々と搬送され、戦況を物騒じた。敵の大縦隊は無統制のまま夜陰に乗じ、味方の屍を乗り越えて東進をつづけ、わが重砲陣地(独立攻城重砲兵第二大隊第一中隊)まで乱入した。この激戦は翌13日午前9時ごろまで続き、敵に与えた損害も大きかったが、わが部隊の犠牲も上陸以来の最大に達した。

第二中隊の戦闘状況

第二中隊は所定の歩哨配備を完了し、二五〇頃、本道上の前哨交代のため槽谷、毛受上等兵、中川一等兵が立哨地点到着直後、五、六十米前方に敵の大縦隊を発見し、直ちに警報射撃を行い中隊長に報告した。

中隊長は木村四郎ラッパ手に非常呼集を吹奏させ、部隊を本道交叉点付近に集結配置し、敵を至近距離に引き寄せ一斉射撃をおこない一時敵を撃退し、水野伍長以下三名の

斥候を派遣して敵情を捜索した。次いで中隊長は主力(第一小隊と第三小隊)を本道上に、第二小隊を歩哨の位置に、第四小隊は手馬の掩護に配備し、敵の襲撃に備えた。(注1)

13日02時頃、態勢を立て直した敵は数縦隊となり、月明の本道沿いに第二小隊の前面に殺到した。第二小隊の十数名は銃撃あるいは手榴弾を投げ合い、白兵をもってこれに突入し、数度にわたる敵の攻撃を撃退した。文字どおりの混戦数時間、長い激戦の夜は明けたが、敵は約三千余の屍体を残して退却した。このなかに第一五九師長、程中將の戦死も発見された。(注2)

本道交叉点堤防上に陣地を占領した中隊主力陣地には、第二小隊正面を通過した敵の大縦隊が怒濤の如く乱入し、彼我入り乱れての死闘が続いた。木村中隊長斃れ、つづいて宮脇軍曹も敵弾をうけて中隊長を被うように折り重なって斃れた。太田第一小隊長は手榴弾により爆死し、下士官・兵多数が傷つき斃れ、敵の損害も多大であったが、中隊主力も決定的な打撃をうけた。

(注・1) 中隊の編成は本部一〇名(書記 獣医下士官、ラッパ手、衛生兵特務兵を含む)と四ヶ小隊。一ヶ小隊は概ね三十名内外。ただし、手馬の位置に手馬兵を残すので、戦闘員は約二十五名ぐらいとなる。(注・2) MG小隊長・福井正勝氏(7期)の日記によると、「当正面の遺棄死体約三千にして、同士討ちにも正のもの多し」と誌している。屍体数は正確に調べた数ではない。

第一中隊の戦闘状況

第一中隊(中隊長39期山野久雄大尉)は、三〇〇頃、本部と第二中隊の中間、本道南側の堤防下に進出したが、想像以上の敵大縦隊の中に突入するの恐を避けて、月が没するのを待つことと数分、月は隠れて暗闇となった。この好機を捉え、山野大尉を先頭に中隊一丸となり、白刃をかざして突入、山野中隊長、平松軍曹戦死、奥村曹長負傷し、中隊の

ひとまず本道付近に集結し、爾後射撃により応戦した。敵は混乱状態となって同士討ちを繰り返しつつ東進し、闇の中に消え去ったが、その一部は9 Kや攻城重砲兵第一中隊の陣地方向に進出した模様であった。

MG小隊の戦闘状況

MG小隊(小隊長47期福井正勝)は、三〇〇頃、聯隊本部付近に進出して陣地を占領し、眼前を右往左往する敵を撃ちまくり、多大の損害を与えた。MG銃身が夜目に赤く熱したという。

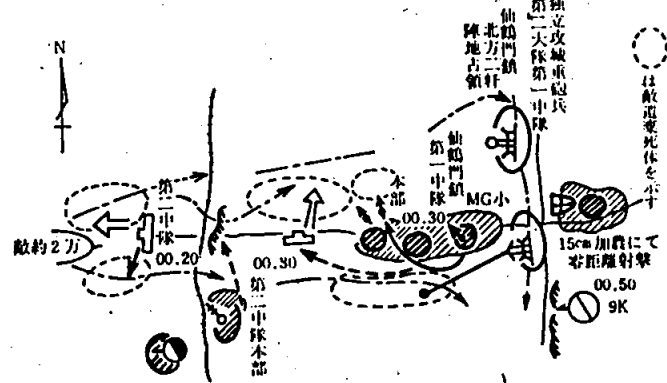
俘虜の言によれば、仙鶴門鎮付近に進出してきた敵は、南京守備の第一五九師を基幹とする約二万で、12日日没とともに玄武門を脱出し、玄武湖南岸を経て発化門の南を通り、仙鶴門鎮に進出したものであることを確認した。

わが軍の死傷者

- 戦死者(第一中隊) 少尉池田正夫、曹長平松米一、伍長浅井悦郎、上等兵柴山勇、(第二中隊) 少佐木村正世、少尉太田重兵衛、曹長宮脇真治、軍曹丹羽正春、伍長大石清、伍長長屋清一、上等兵鈴木光男、上等兵後藤隆芳、上等兵山田忠郎、(MG小隊) 上等兵大谷正男
- 戦傷者(第一中隊) 大尉山野久雄、少尉加藤秀雄、軍曹奥村良平、上等兵川辺留吉、(第二中隊) 伍長山田隆義、上等兵山本武士、上等兵槽谷芳雄、一等兵近藤七郎
- 戦死馬匹、三八頭

筆者注

「佐々木到一少将の『私記抄』によると、一々木支隊の後衛の歩兵第二中隊が、夜半以後、二方面より反復殺到する敵部隊と交戦撃退、さらにその後方の集成騎兵隊が暗黒の裡に敵の襲撃をうけて、部落内に突入せられ、人二百、馬六十の損害をうける失態……」と述べているが、3 K史によると、戦死十四名、戦傷八名、馬匹三十八頭



仙鶴門付近戦闘要図 (昭和12・12~12・13)

の損害であり、食い違っている。この3 Kの戦闘は、『小戦例集』第四輯第三十六(砲兵)の記録と同一のものであり、沢田正久氏49期の「仙鶴門鎮の夜襲」の前哨戦である。また、澄田政夫氏証言の(38)の砲化門の捕虜約七千二百、宮本四郎氏の遺稿「捕虜一万の「投降」と一連の関連性があるように思える。この戦闘記録から、投降俘虜数を推定してみよう。

3 K史添付要図によると、この大部隊は南京城内に待機していた一〇師・一五九師・三六師・一五六師・七四師の五〇師が南京城内から紫金山北方地区を経て進出してきたものと判断している。中国の「抗日

戦史」(前出)によると、南京防衛軍の兵力編組には七四師はないので、総兵力は約四ヶ師であろう。

当時の一コ師の実兵力は、損耗して半減し約三千内外といわれるので、四コ師で合計約一万二千内外と見られる。遺棄死体約三千とすれば、残存兵力は約九千内外となる。逃亡者もあろうから、14日朝晩化門で38iが収容した捕虜約七千二百という人数は、首肯できるものではあるまいか。

これは、まったく紙上の推算であるが、38iの澄田氏は約二千内外といわれる。降捕虜数を確認することは難しい。

### 追記

中山重夫氏の目撃談について (岩仲戦車隊の段列兵として従軍、東京都江戸川区平井一丁目、都営住宅六号棟)

中山氏は昭和12年7月、戦車第一大隊(のちの岩仲戦車隊)の段列兵として応召し、北支から中支に転戦し、南京攻略戦に参加した。毎日新聞(昭和58・8・4)、朝日新聞夕刊(昭和59・6・23)掲載記事によると、「雨花台で四時間余りも老人・子供を虐殺する光景を目撃し、この悲惨な戦争体験を、パネにして、日本軍侵略の記録映画を自費購入して、講演行脚をつづけている」という。

また、「証言・南京大虐殺」(南京市文史資料研究会編、昭和59・8・1発行、青木書店)にも、中山氏の目撃談が「日本軍将士の虐殺の証言」として引用されているので、その梗概を掲載し、前出城島中隊長(岩仲戦車隊第一中隊長)の証言と対照しつつ、筆者の見解を述べる。

〔中山氏の証言〕  
「忘れられないのは南京入城(注1)の二日前、郊外の雨花台で見た光景。白旗を掲げている中国人を藪の上に座らせては、日本兵が次々と銃剣で刺し殺していく。一突きでは死に切れず苦しんでいる人を、軍靴で躑にけ落として土をかける。年寄りであろうが、子

どもであろうが見さかいたしの殺戮がつづき、四時間余りも監視していたでしょうか。その日からは、ああ戦争は嫌だと思つようになった。」  
そして、静岡市の中学校教諭、森正孝氏製作の8ミリ映画「侵略」——南京大虐殺や三作戦を扱った作品——を自費購入して、反戦平和運動をつづけているという(注2)。

姿を認めなかった。  
(注2) 私たちの軽装甲車隊は雨花台から中華門に突進したが、一枚の写真を撮るべく、道路横の藪から身を乗り出した。従軍記者福岡日々新聞の竹山氏は、頭を射ち抜かれて戦死された。当時の従軍記者は勇気で、たびたび第一線に進出されたが、8ミリを撮った人はいないと思われた。  
(注3) 岩仲戦車隊は13日、中山門から入城し、城内の故物保存所付近に集結した。そして、第一中隊が14・15日、中山北路、漢中路に沿い城内掃蕩に協力したが、その状況は城島中隊長の証言(前出)のとおりである。

「大通りから横町まで至るところに死体、婦女・児童の死体が多く、人間地獄」のような状況はない。  
(注4) 中山氏は、どこで生き埋めの光景を見たのであろうか。また、万余の中国人の死体が河に投げ込まれたというが、中山氏は、いつ、どこに行つて、この光景を見たのか。少なくとも入城式の行われた17日までは、一段列兵が揚子江岸まで外出することは許可されなかったはずである。

「中島橋」「万人坑」について  
死骸のぐえに建設された橋、一万五千体余りの死体埋葬の穴——  
(証言・南京大虐殺)99・100ページ)

「証言・南京大虐殺」によると、一九八二年8月11日付「南京日報」よりの転載として、六〇歳の老人朱友才の告発を次のように掲載している。その要旨を紹介する。  
「12月16日の午後、中島部隊(16D)は、旧国民党陸軍監獄に監禁されていた方へのぼた「俘虜」(うち約半数は一般民衆であった)を江東門まで追い立てた。人の群れは道を埋めつくし、江東河のほとりまで約三、四百メートルの長さがあった。  
夕刻、道路両側のわらびき家にかソリンをかけて火をつけ、その火の光が照らすなかで、軽・重機関銃が一斉に火を噴きし、泣き

叫ぶ声は、数里離れて隠れていた朱友才にさえ聞こえた。江東門は死体の山が築かれ、血は流れて河をなした。  
翌日、日本軍はその死体を河に投げ込み、その上に橋板を固定してこれを「中島橋」と名づけた(注5)。大量の戦車、軍用車、騎兵がこの「橋」を通して江東河を渡った。  
氣候がぬるみ水が解けたころ、虹形字會が、この死体の埋葬にあたり、二つの大きな穴に運んで埋葬した。その数は(注6)約一万五千体余り、のち、この地の人はこの穴を「万人坑」と称した……(ゴシック筆書)

【筆者注】  
(注1) 12月16日、16Dは陸軍監獄収容の俘虜一万余を江東門に進行できるように女懲罰にはなかつた。俘虜を陸軍監獄に収容したのが16・17日頃である。(柳原主計参謀の証言)。  
また、16D入城部隊担任の掃蕩地域は作戦命令によれば中山路・中山北路以北であり、江東門付近には10Aの6D・45iが15日以降駐留した。江東門付近を16Dが16日、行動することはできない。  
(注2) 死体を江東河に埋めて「中島橋」と呼び、大量の戦車……が通つたというが、この方面を戦車は行動していない。  
「中島橋」の呼称は、いかなるものであるうか。

また、江東門には、橋がかかっているが、却されておらず、45iはこの橋を通過して前進したのである(45i戦史、参戦者の証言・前出)。  
(注3) 一万五千余の死体に二つの穴であるから、一つの穴に約七、八千体を埋めなければならぬ。パウリッシュベルのな

い当時に、どのようにして穴を掘つたのであろうか。  
不思議な告発記事であるが、私には45iの上新河、江東門、新河鎮付近の激戦(前出)と関係があるように思われる。この激戦で多数の遺棄死体がクリークを埋めた。こ

多



# 南京攻略前後 編集部

の光景を見、あるいは伝え聞いて、「虐殺」に短絡したものとしか考えられない。

## 「日本軍に関する支那軍側の觀察」

(「借行社記事」昭和十四年四月号より)

以下掲載する三篇は各方面に於て入手した支那側文書の訳文である。其の叙述往々正鵠を失し又其の觀察は例により支那側の荒唐無稽多く、往々噴飯に値するもの少からざるも、他山の小石としてしばらく原文の儘採録することにした、此の点読者に具々も御察察を乞ふ次第である。

### 其の一 南京上海抗戦に得たる所の経験と教訓

(借行社編纂部訳)

#### 前言

私は八十八師の上海戦には二回とも参加せし一人にして、現在第三期抗戦開始に際し過去の戦闘経過を詳細報告し以て当局の参考に供し度いと思ふ。

#### 一 戦前に於ける対敵準備

去歲(昭和十二年)八一三の役前、八十七、八十八、三六六の各師及上海警備部隊江蘇保安司令部に砲兵交通同等の特種部隊は悉く前京滬甯衛司令の隷下に入り、秋葉を掃蕩し悉くにて一挙に上海倭寇海軍根拠地を掃蕩し我が空軍は敵の海上艦隊を殲滅せんとするの企圖を策定せるものにして、主動的戰略に立つもの誠に適切なるものと云ふべし。

#### 二 戦争手段上より彼我の比較

##### 甲、戰略方面

戰略上より言へば倭寇と瀟湘橋に於て衝突事件発生せし後に於ても、我が京滬甯衛司令は遂に迅速に部署すること能はざりしに、

適々上海電報飛行場事件に應じ遂に敵側をして準備する所あらしめ、八一三の対峙局面をなすに至れり。

八十八師に就き述べれば、第二百六十四旅の愛国女学校奪還の戦闘に於て若し其の當時勳旅敵軍を得、我が士兵にして傷を裏み屍を踏み鋭意攻撃を継続し得なば、敵の海軍根拠地を破壊し得たらんに、事実には勝機を逸去し爾後戰略地位は遂に顛倒するに至れり。

これ上級者の策を決するに余ありて、遂に猶予の造成する所にして、患これより始めり誠に痛恨事なり。

##### 乙、戰術方面

多数の兵力を敵の堅固なる工事及水上艦隊の前に陳列し、且敵の制空を受け遂に發展をして困難ならしめ、敵は更に其の陸海空軍の優勢なる砲火を以て我に臨みたるが故に兵力を消耗すること頗る大なるものありしなり、但し我が最高指揮部は能く戰術運用を敏捷ならしめ側面攻撃或は奇襲、或は包圍等を以て策応し、要点を保持して得る所多く、倭寇に与ふるに上海戦三月来の最大の打撃を以てせり。

##### 丙、戰闘素質に就き

1. 精神  
上海戦に於て我が方の士氣は終始旺盛にして官兵は攻むれば即ち勇猛に前進し、守れば則ち陣地と生死を共にし、敵飛行機敵艦の下に在りと雖も犠牲を避けずして任務を完成せり。

第八十八師に就きて言へば南北の進攻、八字橋の占領、五州公墓の攻撃、日本ビル会社奪取、愛国女学校の克復、四行倉庫の死守、雨花台の血戦の如き諸戦闘に於て、我が民族の正氣を發揚し國威を張ることを得たり。

##### 2. 技術運用

技術の最も必要なる者は射撃と作業及刺槍(銃剣術)の習熟にして、此の訓練ある歩兵にして始めて克く任に耐へ得るものなり。惟ふに我が軍は僅少なる空軍及砲兵を以て相互の連絡は頗る適切を欠き、我が軍の攻撃をして徒らに犠牲に供するのみにして任務を達成すること能はざりしは、これ我が歩兵の最大の苦痛とする処なり。

例へば我が軍が愛国女学校を攻撃せし時歩兵の某營長能く加農小砲を指揮し、始めて敵の重火器果を摧毁し以て敵人を撃潰するを得たり。

一步を進めて言へば當時若し飛行機、砲兵の確實なる協同を得れば則ち我が軍の損害を減少し得べく、又一舉に倭寇の根拠地を突破して我が第八十八師の首功となすことを得べし。

之を要するに敵軍の兵器は既に歩兵火力より進みて飛、砲及機械化の各聯合兵種を以て之に代へあり、技術運用方面に於て敵は我に比して進歩しありと認めざるを得ざるなり。

##### 3. 裝備

我が方の裝備は比較的劣勢なりしも適時使用し得たり。唯制空権は敵のために制せられ、我が砲兵をして其の威力を發揮すること能はずして、我が戦局に影響を与へたり。

##### 三 戦争素質上彼我の比較

甲、過去の軍政軍令上の欠陥  
我が方は過去の内戦甚だ長く軍令軍政の多くは不統一にして指揮官の程度に差異あり、從つて部隊の訓練も亦之がため優劣あり、甚だしきに至りては内戦の経験に憑りて部隊を指揮する者あり、官兵は射撃と作業技能を欠き連絡も亦適切を欠きし故、機に依りて以て敵を制する能はず、為に戦闘力を減じ且友軍にまで影響を及ぼせしことはこれ上海戦を終束せしむる一原因となれり。

敵軍の指揮官は程度頗る平均し適切に其の部下を掌握し且能く各兵種の協同作用をなし得、加ふるに十分に其の優勢なる火力を發揮し、側翼迂回中央突破及包圍等の戰術を行ひ、以て我が要点を攻略し頗る功を奏したるを究むるに軍令軍政の統一にあらざるは、中下級將校指揮の比較

我が軍の各級幹部の戰闘指揮は頗る能く發揮せられたるも、戰術上の運用は依然として欠陥を感ずるものあり。敵軍幹部以上の組織は我に比し健全なるが如く、敗る(る)も再び集り來りて行動を継続す、我が方は幹部死傷する時は士卒は掌握する能はざるの弊あり。

丙、交通運輸と戦争との關係  
敵軍は海上運輸及機械化を以て弾藥補給は我に比し便利にして、上空の顧慮なきため迅速に少數の兵力を運用し、輕重火器を携帯し配するに十分なる彈藥を以てし、中央突破或は側翼を遂行せり。之に反し我が方は偵察容易ならず、交通阻害せられ補充比較的困難なるを以て兵力多しと雖も、損害を敵に比し大なり。

丁、軍實効力及敵人の精神  
敵軍は多量の飛行機及大砲を以て我が後方の部隊の行動を阻止し頗る成功を取めたり、敵は多くタンクの威力によりて襲撃を行ひしと雖も、我が戦車防禦砲の射撃により其の活動を阻止することを得たり、我が軍は常に夜間を利用して行動し或は突撃を行ひ敵をして施すに策なきを感ぜしめ、敵亦屢々暗夜を利用して攻撃するも敢て深く我が陣地に入らざりき。其の官兵戦争怯怖の一端を見る可し。

戊、衛生救護組織  
敵軍の救護に対する組織は我に比し完備し、常に其の担架兵は匍匐前進して死傷者を救護するを見たり。

我が方を顧みるに一般戦闘員は平時此の点に對し頗る漠視しありて、担架兵の定員は既に不足し訓練は全くなく、為に負傷者の多くは出血過多のため治らず、又死者すら放棄するものあり。

##### 四 上海戦後敵の迅速なる前進の原因

甲、上海戦の失敗  
当初我が軍の官兵は皆、前進ありて退くことなしの壮志を抱きありし故、志氣は終始旺盛なりき。次で大場の守を失ひしと退却の命令のために士氣は遂に頓挫し、其の後の状況は日に非にして上海戦区を放棄せざるを得ずして、多くの軍隊の行動はたゞ混雜の一途の



み。屢々敵飛行機の襲撃に遭ふや損害頗る大にして援護を担任しある部隊さへ、既設の工事を利用して以て敵の追撃を阻止すること能はざりし者さへあり、これ我が掩護部隊の交通路線を破壊すること不十分なりしためによるなり。

乙、倭寇の前進  
敵軍追撃の迅速なりし原因は、我が方の交通路線の与へし便利にして、其の機械化部隊を以て我が戦線を突進し、之がため我が掩護部隊の内には収容任務を完成すること能はざりし者さへあり、これ我が掩護部隊の交通路線を破壊すること不十分なりしためによるなり。

丙、軍民未だ合作する能はず  
江南の人士は古來文弱と称せらる、但し近來倭寇の侵入止まざるに鑑み、怒極りて抵抗を思ふに至りしは理の当然なり。

戦争の未発前該地方の政府は民衆訓練及組織に対しては責任を尽しあり、上海戦發生するに及びて能く軍隊に協力し後方の秩序を維持せり、但し軍隊の撤退せし時指導する人なかりしため各地に四散し、為に敵をして任意に長驅直入することを得しめたり。

五 南京戦役失敗の經過

昭和十二年十一月下旬、我が上海戦参加部隊の一部は命により南京に転進して整理補充をなし、且配するに新鋭の教導總隊及憲兵團等の兵力約十數万を以てし、総て某長官の部下に入れり。某氏等は当時死守するの決心を以て南京近郊一帯に防禦配備をなせり。

最高軍事長官は十分なる軍費を給し、我が軍人民等も亦倭寇の進攻を粉砕するを囑望せざるはなし、倭寇數万の兵力を以て進攻し來りて數日を経過せしのみなるに、遂に全城の秩序混亂し、土をせり、兵力を犠牲にする此

原因を略述するに次の如し。  
甲、蕪湖陥落の影響  
右側翼の友軍は兵力數方にして長興等の地域に防備しありと聞きたり。

敵兵は數に於て限ありしに、甫めて接触す

るや相率ひて潰退し遂に広徳、宜城等の地相繼ぎて陥落するに至り、南京の側背之がため

乙、士氣の不振  
各軍の上海戰場より新に南京に移りし時、原有官兵の生存するもの幾もなく、其の上

丙、背水陣の誤算  
南京近郊一帯の陣地は頗る堅固なりと稱せられ鎮江の封鎖線も亦敵海軍に突破せらる

丁、指揮官の過誤  
指揮官の欲望は能く各級將領をして相信せしむること能はず、且其の頭腦陳腐なるため

甲、慎重に指揮官を任用すべし  
以上を綜合するに、上海戦の初より南京戦

乙、相當の武器を配備すべし  
現代の戦争に於ては質は量よりも重要にし

丙、速かに後備軍を訓練すべし  
後方に待機しある各部隊は以上記述せる事

丁、簡単なる民衆組織訓練工作を施行すべし  
戦下の民衆に対しては農事を妨害せざる原

戊、学料  
愛國の精神を激励養成し、且現代科学戦

己、術科  
各種兵器の射撃及故障の修理並に戦闘法

は勿論、運動戦の部隊に對しても輕便小砲或は迫撃砲を配与して、敵軍の堅固なる火

1. 幹部人才の養成  
参戦後の初級幹部以上（治療せる戦傷官

2. 戦時短期の教育  
愛國の精神を激励養成し、且現代科学戦

3. 民衆自衛の用途となすことを得べし  
民衆を武装せよ

4. 敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

其の二 敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

其の二 敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

其の二 敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

其の二 敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

民衆自衛の用途となすことを得べし  
民衆を武装せよ

敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

敵外線作戦の成功と失敗の検討  
朱 啓 宇 述

其三 敵我優秀の比較 筆者 不詳

敵軍の劣点

(一) 敵軍士兵は迫られて戦ひ、遠く郷土を離れ、均しく深く侵略戦にして不必要の戦争なるを知る。故に犠牲精神欠乏し死を畏るゝの心特に重し。

(二) 機砲の協同なければ歩兵は全く其の戦闘力を失ふ。故に最も夜の夜襲を畏れ、尤も近戦肉薄を懼る。

(三) 行軍力薄弱にして毎日の行程概ね五十里(二十五公里)に過ぎず。

(四) 敵行軍駐軍間の警戒及搜索は多くは厳密ならず、行軍時空軍の偵察を除外せば僅かに騎兵の公路に由る搜索を待みて前進し、公路以外は多くは敵兵なし。

(五) 鉄道公路外を除きては其の部隊の前進多くは遅滞す。山地に在りて尤も然りと為す。

(六) 作戦地後方多くは空虚なり。即ち重要市鎮は常に極少の兵力を駐む。我が軍の優点

我が軍の優点

(一) 官兵皆国家民族生存のためなるを知りて戦ふ。尤も深く日寇は我のため唯一の敵人なるを知悉し、日寇に戦ひ勝つは即ち中国復興の開始と為す。故に均しく壮烈の犠牲精神あり、之に因りて攻撃精神旺盛なり。

(二) 歩兵は其の他の兵種の協力なしと雖も能亦く単独持久抗戦す。歩兵は軍中主兵たるの令譽を発揚す。

(三) 行軍力特に強く通常一日夜百余里を行くべし。

(四) 軍民團結一致、地の南北を分たず、人の老幼を分たず、一致抗戦す。

(五) 地形の困難なるを論ぜず、険を履むこと夷の如し。

(六) 作戦地後方は守備を須ふるなし。敵軍の優点

(一) 裝備完全。能く戦術戦闘の原則を運用す。

(三) 下級幹部の動作熟練。陣地攻撃時搜索偵察確實敏捷なり。

(四) 歩砲空協同確實。

(五) 歩兵の射撃沈著爛熟、乱射せず空射せず、狙撃兵を以て目標の選択発現に對し、甚だ敏活適當と為す。

(六) 戦場清掃、尤も傷者の救護を以てし陣亡者の後送甚だ迅速と為す。

(七) 攻防を論ずるなく均しく構築工事を重視し工作力亦強し。

(八) 戦場の兵力転用迅速。

(九) 潰退時逃れて戦場外に到れば即ち能く迅速に集合し、建制混乱すとも雖も官長均しく能く指揮作戦に任ぶ。

(十) 裝備完全を欠く。我が軍の劣点

我が軍の劣点

(一) 戦術戦闘の原則に熟習せず、更に活用する能はず、各級指揮官多くは只勇敢犠牲を知りて運用を知らず。

(二) 下級幹部は独立作戦の能力稍々差ぶ。

(三) 歩砲空協同不良。

(四) 射撃多くは沈著熟練を欠き、射撃軍紀良好ならず。

(五) 衛生交通設備甚だ差ぶ。傷病の救護後送確實を欠く。

(六) 構築工事を忽視し、尤も攻撃時を以て甚だしと為す。

(七) 部隊間の連繫協同不良、接続部最大の弱点と為す。

(八) 部隊間の境域甚だ深し。甲連長(中隊)乙連の士兵を指揮する能はず。

創業五十有余年 昔は軍服店 今は紳士服店 借行会員にお馴染み深い 昔の軍服を後世の思い出に ご希望の方「国防色」に特製いたします

二報参上 (有)伊藤屋商店 千歳 東京都千代田区麴町四一七 電話 〇三(二六)四八一二

聯隊史等の編集お手伝いいたします

その他 借行特別価格で自費出版の御奉仕致します。

巷間、書店の棚を埋める出版物は汗牛充棟もただならぬものがあります。しかし真に読みたい本は限られております。借行会員の貴方様の貴重なご体験こそ、その限られたうちに入るのではないかと存じます。ご自分の作品をご自分の手で一冊の本にすることができたら、とお考えになられたことはありませんか。ご自身のために、ご家族のために、或は後に続くものために、戦中戦後の回想や、お仕事の記録、隨筆、和歌、俳句等を、すばらしい遺産として残されてはいかがでしょう。弊社では企画、編集、印刷、製本、発送、それにお支払い方法等、ご納得のゆくまでご相談に応じさせていただきます。

- 本の種類 自叙伝・戦記・遺稿集・論文集 講演集・小説・日記・隨筆・歌集・句集・詩集・紀行・写真集・画集・社史・校史・社寺史・古書の復刻版・その他。
●用紙・印刷方式・製本・装幀・カバー・函等、ご相談の上、決めさせていただきます。
●口述筆記、テープ筆記の用意もあります。
●その他家系図の調製もしております。
●御見積り凡例 隨筆集(400字原稿約120枚) 部数：300部 規格：B6本文80頁 用紙：上質紙 印刷：活版、オフセット 製本：並製本 金額：約30~40万円

下記宛ご一報下さるか、お電話いただければ 詳細資料 お送りいたします。 資料請求券ご利用下さい。(郵送料不要)

印刷・製本 中島印刷株式会社 常務取締役 岩沢 漸 二(57期) 電話 03(493)0551(代) 営業推進部長 岩沢 孝二郎(58期) 〒141 東京都品川区西五反田4-31-17 企画・編集 株式会社エム・シー・アイ 取締役社長 根岸 正直(58期) 電話 03(564)6854(代) 〒104 東京都中央区銀座1-15-7(マック銀座ビル2F)

